

羽村市史編さんだより

平成28年7月

第6号

# 伸びゆくはむら

特集

1960年代の羽村と

東京オリンピックピック

2



- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとなべえ」

# News

## むかしの写真募集！

昭和以前の羽村に関する写真はありますか？

広報はむら7月1日号でお知らせしていますが、郷土博物館では、市史編さん事業にも活用させていただき昭和以前の写真を集めています。くらしの様子や風景、まちの移りかわりなど、どのようなものでも構いません。

古い写真をお持ちでしたら、ぜひ郷土博物館までお寄せください。お寄せいただいた写真は複写した後に返却します。

※今回の写真募集は、郷土博物館と市史編さん室が協力して行いますが、写真のお預かり、お問い合わせについては、郷土博物館までお願いします。

募集期間 平成28年7月1日～10月31日

問合せ 羽村市郷土博物館

電話：042-558-2561

Eメール：s709000@city.hamura.tokyo.jp



▲昭和48年（1973） 完成間もない羽村駅東口



▲昭和49年（1974） 産業祭風景



▲昭和40年（1965） 都下一周駅伝競走大会



## 表紙の写真 1964年東京オリンピック聖火リレー

写真（上）は、奥多摩街道（玉川上水第3水門付近）を走る聖火リレーのランナーです。雨の中、歴史的瞬間に立ち会おうと多くの住民が詰めかけています。

写真（下）は、羽村を抜けたランナーが、整列して待つ福生のランナーに聖火を引き継ぐ直前のシーンです。大役を果たした安堵感と、これからスタートする緊張感が交錯しているようです。

それぞれの地点の現在の様子と比べてみました。50年という時はどう流れたのでしょうか。

## ● 東京オリンピックとその時代

1960年代は高度経済成長期における都市開発の潮流のなかで羽村が大きく変貌していく時期でした。なかでも首都圏整備法に基づく昭和37年(1962)の市街地開発区域の指定は、職住近接の街づくりの出発点となり、現在の羽村を形成する基盤となりました。さらに昭和39年(1964)の東京オリンピック開催が決定すると、首都圏整備事業費にオリンピック関連事業予算が計上されたため、事業に急速な進展が見られました。

## ● 1964年東京オリンピックと羽村

昭和39年(1964)東京オリンピック開催に当って、羽村もまた他の市町村と同様に様々な取り組みを行い、気運醸成を図りました。

開催準備として東京都は「一千万人の手で東京をきれいに」をスローガンにして首都圏美化運動を展開しており、羽村においても開催1か月前の9月6日午前8時より「一斉に大掃除を行いますから皆さん一人残らず参加して下さい。」という声掛けをしています。このような地域を挙げての清掃活動は点検カードをチェックしながら指導を行うという徹底したものであったようです。

さらに聖火リレーが開会式2日前の10月8日に羽村を通過することになり、羽村から聖火ランナーとして正走者1人、副走者2人、従走者20人が選抜されました。10月8日の天候は雨でしたが、聖火は羽村の聖火ランナーから福生の聖火ランナーへと無事引き継がれていきました。



▲玉川神社前で聖火の到着を待つ聖火ランナー

## ● 都市化する羽村

それでは東京オリンピックが開催された昭和39年(1964)前後の羽村はどのような地域だったのでしょうか。

当時は冒頭でも述べたように首都圏整備法に基づく区画整理事業が開始され、都市開発が推進されていた時期でした。そのうえ区画整理事業の前段階において工場誘致を図った結果、昭和36年(1961)日野自動車の羽村進出が決定しました。このような工場誘致は税収の呼び水になっただけでなく、雇用の増大を招き、他地域から羽村へ移住する人びとが増加する傾向にありました。



▲操業間もない日野自動車

さらにこのような変化に対応するために昭和37年(1962)に上水道施設、昭和38年(1963)にし尿処理場が設立されることにより地域のインフラが整備されただけでなく、住宅エリアの開発が目指された結果、職住近接の地域へと変貌を遂げていきました。



▲神明台区画整理 都市計画街路

## ● 市史編さんの調査

1960年代の羽村の歩みを辿れば、現在とは異なる地域の様相が現れます。昭和39年(1964)の東京オリンピックがもたらした、1960年代における急激な都市開発と急成長は羽村にも様々な角度から影響を及ぼし、その遺産は現在に継承されています。今回の市史編さん事業では昭和49年(1974)に刊行された『羽村町史』ではあまり触れられることのなかった戦後の歩みを充実させます。その際に市民の皆様が所蔵されている写真も参考にさせて頂く予定です。

# 部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。

## 用語の解説

**梵字**…<sup>ぼんじ</sup>サンスクリット語を表記するための文字。日本では、一文字で神仏等を表す。

**蚕室**…<sup>さんしつ</sup>蚕の飼育専用の建物。市内には数棟残っているが、蚕の飼育は行っていない。

**膳椀**…<sup>ぜんわん</sup>食器類のこと。昔は、冠婚葬祭などの人寄せの際に使用するものが、地域の共有物として一か所に保管されていた。

## 第1部会 ～原始・古代・中世～

中世班では、妙徳山禅福寺で中世石造供養塔調査を行いました。境内に並ぶ五輪塔は、中世以外にも近世期のもも確認されました。五輪塔は、積まれた石の下から「地・水・火・風・空」を表しており、しばしば漢字や梵字でその文字が刻印されます。表面が風化し読みづらくはなっていますが、拓本を採ることでよりはっきりと文字を見ることができました。

縄文班では、過去の発掘調査資料を整理しています。山根坂上遺跡から出土した縄文土器の破片や石器などの調査で得られた情報は20万件以上あり、当時の生活の様子を明らかにするため分析を進めています。



▲禅福寺五輪塔調査の様子

## 第2部会 ～近世～

近世期の羽村・五ノ神村・川崎村に残されている古文書の調査を行っています。当時の村政を担っていた家々や寺社・商家など、それぞれの村の記録を対象に順次調査を進めています。

右の写真は「大福帳」と呼ばれる史料で、商売の様々な記録を控えておいたものです。

この史料では福生村などの隣接していた村だけでなく八王子（文中では「八王寺」）など少し離れた場所とも取引をしていたことを確認することが出来ます。

このように史料から読み取れる情報を余すことなく収集し、整理作業を進めています。



▲古文書に記された商売の記録



### 第3部会 ～近代・現代～

資料編「近現代写真図録編（仮）」の刊行に向けて、市の刊行物に掲載された写真の複写を行っています。並行して、郷土博物館所蔵の写真整理にも着手しました。今後は市民の皆様が保管している写真も参考にさせて頂く予定です。

また、引き続き資料の閲覧・情報整理を行っています。作業内容としては、郷土博物館収蔵資料や行政資料の閲覧、新聞記事目録データベースの作成、個人が保管する資料の整理、関係機関に保管されている資料を確認するなどして、近現代の羽村に関する調査を進めていきます。



▲写真整理作業の様子



### 第4部会 ～自然～

地形地質班は、立川断層調査と礫層調査のため近隣市へ出かけました。青梅市内での調査では、立川断層の活動により形成された斜面を確認しました。

気候班は、今年度も市内全域の気温の移動観測と風向・風速の定点観測を行っています。5月には春の観測を行いました。今年も計4回、季節ごとに実施する予定です。

生態班は5月に市内全域にて一斉に鳥類調査を、6月には市内緑地にて植生調査を行いました。鳥類調査ではツミ（タカ科）、アオサギ（サギ科）の巣をそれぞれ市内で確認しています。



▲青梅市内の調査地点



### 第5部会 ～民俗～

市内に残る蚕室の調査を行い、養蚕が行われた当時の、建物の構造や作業内容を記録しました。

また、小作本町会館に保管されている膳椀の調査を行いました。どのような種類のお膳やお椀が残っているかを確認し、それが生活の中でどのように使用されてきたのか、現在調査を進めています。

引き続き、人々の暮らしに関する聞き取り調査も進めています。



▲膳椀調査の様子

# 市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
4月	1日(金)	④ 市内礫層調査
	12日(火)	⑤ 聞き取り調査(個人宅)
	15日(金)	羽村市史編さんだより 第5号発行
	20日(水)	④ 断層調査(青梅市・瑞穂町)
	23日(土)	① 中世石造供養塔調査(禅福寺)
	25日(月)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
5月	9日(月)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	10日(火)	⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	11日(水)	④ 断層調査(青梅市・飯能市) ⑤ 旧蚕室調査(個人宅)
	15日(日)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測 ⑤ 聞き取り調査(個人宅)

月	日	できごと
5月	19日(木)	④ 礫層調査(あきる野市)
	22日(日)	④ 市内鳥類調査
	23日(月)	①② 市内石造物調査
	24日(火)	② 個人宅(五ノ神)史料調査 ※以後定期的に実施
	29日(日)	③ 郷土博物館写真資料調査
	30日(月)	⑤ 小作本町会館保管の膳椀調査
6月	31日(火)	⑤ 小作本町会館保管の膳椀調査
	12日(日)	④ 市内植生調査
	14日(火)	① 中世石造供養塔調査
	15日(水)	④ 断層調査(国立市)
	24日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収

## コラム

## ちっとなべえ

江戸時代の名主と呼ばれる人達の家には、年貢の支払や領主からの命令の写しなど様々な史料が残されています。それらの史料からは名主が村において重要な役割を果たしていたことがわかります。

村の運営に携わっていた名主は、どのような人物だったのでしょうか。『皇国地誌』という明治期に作成された資料には、江戸時代に羽村の名主役を勤めていた人物について以下の様に記されています。

(本文)「…撃剣ノ業ヲ天然理心流二祖近藤三助ニ学ヒ、(中略)和歌ヲ好海野遊翁ニ学ヒ、一世ノ詠多シ。マタ囲碁ヲ嗜ミ、初老ノ頃ヨリ頗ル妙手…」

(内容)「…剣術を天然理心流二代目近藤三助に学び、(中略)和歌を好み海野遊翁に師事し、優れた詩歌が多い。また囲碁を嗜み、初老の頃から非常に強く…」

## 第6回 「名主は村の“文化人”？」

上記から名主の職務を遂行しながら、剣術を学び、和歌を詠み囲碁を楽しんでいた人物であったことがわかります。この人物の家には現在も江戸時代に作成された和歌に関する蔵書が残されています(写真)。

江戸時代の村に住んでいた人々は、専ら農業など家業に従事していたイメージがあると思います。しかし家業に従事しながら、一方では剣術の修行や和歌・囲碁など多様な活動を行っていたことがうかがえます。(S.Y 記)



※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。